

第 16 回 英国短期語学研修報告

野 田 繭

1. はじめに

2016 年度英国短期語学研修は 7 月 31 日から 8 月 21 日の日程で実施された。なお、生徒は 1 学期中に国際交流委員の各教員から事前学習を受け、文化祭では事後学習の発表をした。今年度の参加者は高校 3 年生 3 名、高校 2 年生 7 名、高校 1 年生 6 名の計 16 名、昨年度の 30 名に比べると少人数のグループとなった。

6 月下旬の国民投票で英国の EU 離脱が決定し、その影響が心配されたが、研修自体に大きな影響はなかった。

今年度の研修は、研修を行う語学学校 Richard Language College（以下 RLC）への到着が深夜となった。直行便は費用がかかるため、ドイツを経由する便を利用したが、2016 年はリオデジャネイロオリンピックが 8 月 3 日から 21 日の日程で開催され、日本からドイツを経由しブラジルへ向かう旅客が多かったため、航空券の手配が難航し、RLC への到着が深夜になってしまう便しか手配できなかつたようである。そのため、例年のように RLC でホストファミリーと対面するという形ではなく、RLC からタクシーでそれぞれがホームステイ先を訪れるというこれまでにない形でのスタートとなった。しかしホストファミリーとのファーストミーティングもほとんどが問題なくできたようで、翌朝の集合に遅刻する生徒もいなかった。

引率は外国人特別講師であるアダム・ラブ先生と国際交流委員の野田で行い、添乗員として JTB から増田寛子氏が同行した。

本報告では、研修の概略と今年度の実施で特筆すべき点を記していく。

2. 研修の意義

この研修では、生徒は 3 週間、ボーンマス（Bournemouth）のイギリス人家庭にホームステイし、平日は RLC で授業を受ける。水曜日の午後と土曜日には、ボーンマスを離れて研修を行う（エクスカーション）。1 週目の水曜日にはポーツマス（Portsmouth）、土曜日にはバース（Bath）、2 週目の水曜日にはストーンヘンジ（Stonehenge）とソールズベリー（Salisbury）、土曜日はオックスフォード（Oxford）見学を実施した。また RLC では放課後にアクティビティーを企画しており（詳しくは後述）、生徒は任意で参加した。また、

生徒には研修期間中、毎日日誌を書くことが課されており、引率者は毎朝提出される日誌をチェックする。これは生徒にとっては研修の記録となり、引率者にとっては生徒の家庭での様子や、内面を把握することに役立つ。イギリスの文化に触れ、語学学校の教師や生徒、ホストファミリーと英語で交流することがこの研修の主な目的である。

当初生徒は、親元を離れ、海外で生活する中で、はじめは何かとすぐに引率教員を頼り、だれかが助けてくれることを期待するような受け身の姿勢であった。しかし、身の回りのことを始め、自分のことは自分でしなくてはならない環境に身をおくことで、次第に自発的に行動することの必要性を感じるようになる。たとえば、ホストファミリーとの問題に直面するとまずは自分でコミュニケーションをとって解決しようと試みるようになった。また、授業についていけないと感じた生徒は、はじめはクラスを替えてほしいと訴えたが、授業の復習をしたり、ラブ先生に質問をするなど努力を重ね、授業中に積極的に発言できるようになった。また、引率者がそのような指示をしなくともエクスカッションで行く先のことをホストファミリーに聞いたり、平日の昼食はRLCのカフェテリアや近くのコンビニを利用することもできるが、サンドイッチを自分で作って持参したり、またそれをホストファミリーと一緒に作るようになった。

学校が行う短期海外留学といえは2週間程度のものが多いが、本研修はおよそ3週間と期間が長い。週を追って研修の進捗をみると、1週目は、異なる文化や生活習慣、ホストファミリーや留学生とのコミュニケーションに戸惑い、不安を感じている生徒が多かった。2週目になると少し慣れるので緊張や恥じらいが薄れるが、それでも授業についていくことやホームステイ先で過ごすことで精一杯のようで、余裕がない印象であった。2週目の後半になってようやく英語での交流や海外での生活が楽しいという声が聞けるようになった。3週目になると、それまでの2週間で体験してきたことを使ってなにかをしようとする変化があった。授業以外でもRLCの講師や留学生と話す光景がみられるようになり、留学生と待ち合わせをして街に出かけたり、ホストファミリーと難しいテーマの話なども英語でするようになった。また当初は日本語で話していたラブ先生とも英語で話す様子が見られるようになった。

英語技能の向上は勿論この研修に期待される成果であるが、前述のように生徒の変化がうかがえるのは3週目であり、日本とのさまざまな違いに刺激を受けるだけでなく、自分が体験したことをもとに自発的な行動ができるようになるには必要な期間というものがあると感じた。夏休み中に実施することを考えると3週間より長い期間を設定することは難しいが、研修期間が3週間である意義は大きいと考える。

3. 研修にかかわる人について

この研修がより効果的なものになるように RLC には様々なサポートがある。RLC は主にヨーロッパ諸国から留学生を受け入れているが、本校の生徒を受け入れている期間、他の日本人留学生を受け入れないことになっている。日本人がいると、どうしても日本人でかたまってしまう傾向があるので、このことにより日本以外の留学生と多く交流できるようになる。今年の研修期間中は、フランス、トルコ、サウジアラビアなどの留学生がいた。

また、校長のクリス氏やマネージャーのアマンダ氏は、RLC の授業や、本校生徒とホストファミリーの間の様々な問題を解決してくれた。RLC で最初に受けるプレイスメントテストでクラス分けが行われ、英語の技能に応じて少人数のグループに分けられるが、文法の理解度に対してスピーキングを苦手とする日本人生徒は、授業についていけないと感じ、よりレベルの低いクラスに替えてほしいと訴えることがある。例年このような訴えはあるが、こういった場合には、クラス変更が本当に必要かどうか、アマンダ氏が授業担当教員と連携をとって判断する。また、ホストファミリーから本校生徒についての相談(生徒が部屋を片付けない、話が通じているかわからない等)は RLC に連絡され、そういった相談があればアマンダ氏と引率教員が連携して対応する。また、この研修のホームステイでは、1つの家庭に本校生徒は1人まで、本校生徒を受け入れる家庭は研修期間中、他の日本人を受け入れない取り決めになっているが、この取り決めに違反し、他の語学学校を通して日本人留学生を受け入れてしまうことがある。今年度もこのようなことが起きたが、すぐに生徒から引率教員に報告があり、アマンダ氏が迅速に対応し、あとから来た日本人留学生は他の家庭に移ることとなった。このように、RLC のスタッフは、研修中のあらゆるトラブルに対応し、生徒にとってよりよい研修環境になるよう努める。イギリス人と日本人では仕事に対する姿勢が異なり、こちらの望むような対応が一概に期待できるものではないが、RLC はこの研修のことをよく理解し、きめこまやかな対応ができる。

ラブ先生は今回で3年連続の引率となった。英国出身のラブ先生は、生徒や RLC からの信頼が厚い。またそれ以上に、生徒に母国の良いところを伝え、生徒が英国を楽しめるようにしたいという思いから、研修中の様々な場面で文化の違いによる生徒の不安を解消し、英国の生活を教えてくれた。また、この研修がより良いものとなるように積極的な提案を続けている。たとえば研修費を削減するためにロンドン滞在を旅程から外したことや、RLC やホストファミリーからの要望や昨今の状況も鑑みて今年度初めて生徒にプライベートの携帯電話を持たせたことは、ラブ先生の発案による。

今年度の研修には添乗員として JTB の増田寛子氏が帯同した。増田氏の帯同は7年目となる。RLC のスタッフとの信頼関係も厚く、現地の様子もよく把握している。羽田空港の出発から、RLC、エクスカージョンで訪れた先、帰国まで、引率教員も含め20名弱

の団体をトラブルなく率いてくれた。教員は日頃生徒に対して団体行動の指導を行っているが、特に海外で、十数名の生徒を限られた時間の中で安全に行動させることには特化していない。たとえば空港やエクスカーションで訪れた先で生徒をトイレに行かせることにしても、いつ、どのくらいの休憩をとればよいか、一番近く、団体に使える無料のトイレはどこにあるか等、その場の状況に応じてすみやかな判断が必要になる。また、今年度はフランクフルト空港を経由しヒースロー空港に向かったが、ほとんどの生徒にとって海外の空港での乗り継ぎや入国審査ははじめての経験であり、そのような集団を短い移動時間で行動させるために、小さなトラブルも避けるべきであり、こまやかな配慮と指示が必要であった。さらに、オックスフォードへのエクスカーションでは、希望者はクライストチャーチを見学したが、増田氏の交渉によって団体入場することができ、長蛇の列に並ぶことなく、生徒はオックスフォード散策を十分に楽しむことができた。決められた時間で安全かつ最大限効率のいい旅程の管理は、教員による生徒指導とは異なる添乗員の役割であると感じた。また、このような旅程の管理を添乗員が担うことで、教員は生徒指導に集中することができた。

4. アクティビティー

RLC では、平日の放課後にアクティビティーと呼ばれる交流プログラムを設定している。参加は任意で、別途費用が必要なものもあるが、本校の生徒を含む RLC の留学生が参加する。RLC の中庭でのバーベキューや、パブでのクイズ大会、映画鑑賞、レーザークエスト (Laser Quest / シューティングゲーム) などがあり、本校生徒が参加する場合は教員が帯同する。参加人数が少ないとその日のアクティビティーが中止になることがあるが、今年度もほかの留学生も含め、参加者が集まらず実施されないことがあった。例年本校生徒に人気のあるレーザークエストも研修前半には設定されず、全体を通して本校生徒の参加率は高くなかった。また、今年度はじめて生徒に緊急連絡用としてプリペイド式の携帯電話を貸与したこともあってか、本校生徒同士で連絡を取り合って行動する機会が多く、アクティビティーに参加するよりも生徒同士でザ・スクエア (The square / ボーンマスにある広場で、多くの店が集まっている) に繰り出すことが多かったようだ。貸与した携帯電話には、ホストファミリーや引率者の連絡先だけでなく、参加生徒全員の連絡先も登録してあった。これはアマンダ氏の厚意によるものであったが、生徒同士の連絡を容易にしてしまったという点においては、それが裏目に出てしまったかもしれない。ザ・スクエアの店で英語を使って買い物をするのも一つの経験ではあるが、そればかりでなく、アクティビティーにも参加して留学生と交流を深めることを、引率者としては期待していた。生徒にはイギリスでしか体験できないことに積極的に参加するよう促したが、アクティ

ビティーには別途費用がかかることもあってか、参加率が上がらなかったことは今年度の課題の一つとなった。次年度以降、事前学習において、携帯電話はあくまでも緊急連絡に用いること、本校生徒同士でかたまりすぎないことをより強く指導し、アクティビティーへの関心を高めることが必要ではないかと考える。

5. RLC での授業

RLC で行われる授業は、入校時に実施されるプレイスメントテスト（筆記、リスニング、英作文）によって様々な国の留学生を少人数のグループに分ける。午前が文法、午後が会話の授業で、ゲームやクイズ、ディベート、グループワークなどのいわゆるアクティブラーニング型の授業も展開されている。文法の授業では、内容が高度で理解できないといったことはほとんどなかったが、会話の授業では、躊躇なく発言するほかの留学生に気圧され、なかなか発言できず苦しんだ生徒が多かった。しかし、研修が進むにつれ、流暢に話しているように聞こえたほかの留学生が、間違った文法で話していることが多いことに気が付き、自信をもって発言するようになった。

生徒が RLC の授業を受ける上で、次年度は事前学習で文法用語を学習した方がよいと感じた。“subject (主語)”, “verb (動詞)”などは知っている生徒が多いが、“preposition (前置詞)”や“present perfect (現在完了形)”などは知らないことが多く、またたびたび“p.p. (present perfect や past perfect / 現在完了形)”や“p.c. (present continuous / 現在進行形)”といった省略形も説明なく多用され、それが文法用語ともわからず困惑していた。今年度は生徒からの要望で、急遽文法用語をまとめた表を配布したが、事前に理解しておくべきであった。

私自身も社会人クラスの授業を体験した。文法と会話の授業を受けたが、どちらのクラスの講師にも発音を重要視した指導を受けた。恥ずかしさからそれらしい発音をすることを避けて、いわゆるカタカナ的な英語を話すと、通じないことも多かった。また私が振り分けられたクラスにはブラジル系フランス人、スペイン人、中国人、韓国人、サウジアラビア人、インド人がいて、看護師、大学院生、教員など国籍も職種も様々であった。英語が話せないのであまり発言しないしていると、講師に指名され、発言を強く促されることが多々あった。私以外の受講者はみな日常会話レベルのスピーキングができるので、つたない発音で話すことにはますます抵抗があったが、同じように英語を母国語としない彼らは、辛抱強く私の発言を待ち、意図をくみとろうとしてくれたので、会話することができた。

授業で印象的だったのは、“e”の発音の解説であった。“e”は、e にアクセントがあるときは [é], ないときは [ə] または [ɪ] と発音する。同じ“celebrate”という単語でも、活用によってアクセントの位置が変わると“e”の発音はかわる。以下はその例である（下

線部にアクセント)。

celebrate (1つ目のeは [é], 2つ目のeは [ə]) <動詞>祝う

celebration (1つ目のeも2つ目のeも [ə]) <名詞>祝い, 祝賀会

celebrity (1つ目のeは [ə], 2つ目のeは [é]) <名詞>有名人, 名声

同じ“e”でも「エ」と発音するのではないということをはじめて知った。こういったこまかな発音についての知識を、私はいままでに習ったことがなく、RLC講師が母国語ではない言語として英語を学ぶ留学生にもイギリス人が使う英語の発音を教えようという意識が高いと感じた。彼らはイギリス英語に誇りをもっており、そういった姿勢をみることも英語の学習意欲を向上させる理由になるのではないかと考える。

このように、留学生の中で英語を学ぶ体験を通して、生徒がどのような環境で学習しているのかを実感として理解できたことはとてもよいことであった。

6. 引率教員

引率者の確保は大きな課題である。例年教員2名で引率を行っているが、国際交流委員の中からその2名を決めることは難しく、最近では国際交流委員1名と委員会以外から1名で引率を行っている。3週間という長期間、家庭や部活動から離れられる人員を確保することは難しい。また、次年度以降、予算の関係上、引率者が1名に限られた場合、英語の技能が十分にある教員や、海外での長期引率が可能な、ある程度の引率経験がある教員に対象がしぼられるため、引率者を募ることはより難航すると考えられる。16年続くこの研修は、生徒の満足度も高く、また前述の通りほかでは得難い経験ができる意義のある研修である。また、引率教員にとっても、生徒の成長を短期間でみることができるとあり、イギリス英語に触れられるよい研修機会にもなりうることから、多くの教員が引率経験できることを期待する。そのためには、引率教員の途中交代や部活動の負担軽減等、引率が可能な教員を増やせる仕組みが必要である。

7. 終わりに

私にとってははじめての英国短期語学研修引率であったが、参加生徒が3週間という期間で大きな成長を遂げることをみることができるとよい機会となった。高校生という将来を具体的に考えはじめる時期に、このような経験ができることは、かれらの将来に役立つだろう。また海外への生徒引率もはじめての経験であったが、様々な先生方のサポートによって無事研修を終えることができた。

生徒を参加させてくださった保護者の方、国際交流委員をはじめとする先生方、ラブ先生、増田氏に感謝いたします。